

〈巡検の記録〉

第 1 学 年

高 尾 山 （ 浅 井 教 官 ）

昭和45年 7 月 4 日～ 6 日

大学へ入って初めての巡検は高尾山であった。なぜ高尾山が宗教山地となり得たか、そして宗教山地であることが、自然保護上どんな利害を与えているかということが、研究の中心テーマである。高尾山頂には、行基開創といわれる薬王院があり、室町時代以後は、山岳信仰と真言密教が結びついて、山伏の修験道場ともなっていた。また現在においては国や都や私鉄が自然保護に力を入れ、観光地として誘致に努め、私達には都心に一番近い山として知られている。

巡検の一カ月ほど前から小グループに分かれ、それぞれ小テーマに基づいて下調べをした。少々当惑気味だったが、やがてそれぞれ気象庁や厚生省、営林局、図書館などで資料を集め、巡検の前日にその成果を発表した。興味深かったのは、関東周辺の宗教山地のおびただしい量である。現在では神仏観念が薄れたせいかわ、どの山に何という神社があるということさえほとんど知らなかったが、関東地方のほとんどの山々はみな宗教山地であるのにはびっくりしてしまった。これは江戸時代、都に近い利点によって栄えたのも、今に残る一因であるが、古くは平野のはずれに雄々しくそびえる山 — 特にその山容が、左右対称であったり、うっそうとした森林や溪流がある場合は、民間信仰の対象となりやすかったからであろう。

巡検の第一日目は、行きの電車の中で、気候学で習った都市気候の実測を行なった。雨のせいかわ、著しい特徴は見られなかったが、都心ほど蒸気圧は高かった。午後は、自然科学博物館を見学し、館長さんや薬王院の住職の方々のお話をお聞きした。二日目は、ケーブルカーを使って高尾山へ登った。このケーブルカーの勾配は $31^{\circ}05''$ で日本一だそうだ。早速、垂直気温低減率を調べる。午後は頂上の Visiter Center を見学した。三日目は、各自テーマに従って、グループ別に調査を行なった。

三日目、あいにくの雨天続きで、期待していたほどの調査は望めなかったが、下調べて調べたことを実際に現地を確認したのは面白かった。特に尾根筋の南と北で、暖帯林から温帯林へ移行する

所では、明らかに林の色も密度も林相も異っていた。また宗教山地であり、同時に観光地である高尾山の真の姿を、頭をたれ、手をすり合わせて一心に祈っている老人の姿や無邪気に石段を駆け登っていく子供連れの家族の姿に、まざまざと見る思いがした。(1年 沢)

第 2 学 年

すばらしかった富士山巡検 (浅海 教官)

昭和45年10月18日～22日

(第1日)

高尾駅に集合し9:25発の松本行で出発。テストは終わったし、馬肥ゆる秋だし気分良好。上野原付近と猿橋付近で窓の外に続くみごとな河岸段丘について、先生がその地質地形的構造を説明して下さる。大月で下車して、溶岩が道端の崖となって数百m続いているのを観察する。右手の崖に対し、左手は1段低い所に田がありもう1段低い所が川原になっている。昔多量の溶岩が川原をおおい、後に川の侵食が復活してメアンダーにより段丘面ができたとのこと。この溶岩は富士山まで追跡できるそうだ。川原には第3紀の御坂層が広い範囲にわたって露出している。川は地盤の弱いところを選んで流れているのだ。ススキやコスモスが風に揺れていた。第3紀層の基盤岩石でできている岩殿山に登ってから、単線のガタゴト電車に乗り換えて河口湖に向かう。バスを乗り継ぎ、周囲の山々が霧に煙るころ、人気のないガラーンとした西湖ユースホステルに到着。空気が冷たい。

(第2日)

ユースに対し西湖と反対側には第3紀御坂層の山々がせまっている。平地に移るところがいくつもの扇状地となっている。ユースのすぐ後の扇状地上にあったのが根場部落である。約40戸の農家で人々は林業、養蚕、酪農などで細々と暮らしていた。平和であったこの部落が昭和41年26号台風による土石流によりほとんど全戸崩壊、部落の3分の1の死者を出すという大きな災害をうけた。もろい第3紀層が多量の水分

